

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25501021

研究課題名(和文)リビングヘリテージの比較研究

研究課題名(英文)A Comparative Research on Living Heritage

## 研究代表者

西村 正雄(Nishimura, Masao)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：30298103

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本年は最終年度のため、研究成果発表に向けてのまとめの作業を行った。平成26年度までに収集した資料の整理と分析；補足の資料収集のための追加のフィールド調査；現在までの成果の発表、である。ラオスおよびフィリピンのフィールド調査で得られた資料の分析を行った。ラオスに関しては、チャンパサック県における世界遺産における住民の関わり方に関して、分析を行った。各住民の遺産への意識の点で、「公の遺産」の概念が多くの住民に共有されていることを確認した。フィリピンでは、「自分の家族の遺産」がまず優先することが確認された。この点を補足する上で、古い写真資料の解析を行った。成果を国際学会で発表をした。

研究成果の概要(英文)：Since it was the last year for the 3-year project, the research concentrated on analyzing of pattern seen in the dataset and reinforcing weak points of the dataset. So far the following points were found: 1. in the Laos case, it seems to me that the concept of public space or object is widely shared among the residents of Champasak World Heritage, and so they do respect those objects such as Vat Phou monuments. However, they will also be well aware of their family or own herited objects. They think that those are connected to the publicly inherited objects. On the contrary, in the Philippine case, inheritance family heritage always comes above the public heritage. Rather, it is very rare to see families who have a clear idea on what public heritage is. Those families are competing to exhibit their family heritage, and eager to justify the authenticity of their family in the community. They are rather competitive, and so the heritage plays a role to promote family competition.

研究分野：文化人類学、遺産学

キーワード：リビングヘリテージ 遺産 ラオス フィリピン チャンパサック セブ 文化人類学 世界遺産

## 1. 研究開始当初の背景

本研究に関連する先行研究の多くは、欧米、南アジア、太平洋諸国の研究者によって遂行されてきた(例、Achier, H. and Y. R. Isar eds. 2011; Bortolotto 2010)。しかし、本研究が主眼を置いている東南アジア地域では、ごく限られた数のパイオニア的研究があるのみであった。

まず、東南アジアにおいて、こうした研究に先鞭をつけたのが、三浦恵子であった

(三浦 2004, 2011)。三浦は、カンボジアのアンコール遺産の研究から、調査当時 2000年 - 2004年 に、アンコール遺産の保護のため、諸外国隊が入り修復をし、それに合わせる形で、カンボジア政府自体の遺産の保存に向けた機構改革が行われてゆく中で、遺産の周辺に暮らしてきた住民たちがいないがしろにされ、周辺化されてゆくことに疑問を持ち、住民と遺産との関わりに関する調査を開始した。こその中で、住民は公の機関が公式化した保存の考え方とは異なったロジックで、また遺産と関わり、それらを保存しようとしてきたことを見出してきた。このことを称して、三浦はリビングヘリテージと呼んできた。

ラオスに関しては、三浦の研究とは別に、チャンパサック世界遺産内の村落調査をした小田島理絵は、やはり村人たちが日常生活の中で遺産と関わりあってきたことを見出してきた(小田島 2014a, 2014b)。

また研究代表者は、本研究以前から、研究地域において、予備的な遺産の調査を行ってきた。その調査は主に遺産の現在の状況確認、また遺産の範囲を性格付けのための人類学的、考古学的調査であった(例、西村 2007a, 2007b, 2008, 2014)。

## 2. 研究の目的

本研究は、遺産研究の中でも近年関心の高いリビングヘリテージについて、その概念を明確にすることを目的としたものであ

る。具体的には、遺産と人々の関わり方の多様性を見るため、ラオスの世界遺産地域(チャンパサック県)とフィリピンの遺産(セブ市中心部)におけるそこに暮らす人々と遺産との関わり方を比較検討することで、リビングヘリテージの概念をより明確にすることを目的として研究計画を立案した。最終的に、研究を通して、人々が真に考える遺産とは何かを明らかにして、遺産保護への新しい方法を考えて、政策立案に生かしてゆくことを究極的な目的とした。

## 3. 研究の方法

比較検討する資料としてはほとんどないのが状況であった。こうした既存の先行研究を精査して問題点を明らかにすることは重要であったが、資料がほとんどない状況では、資料の収集が緊急の課題であった。そこで、ラオスのチャンパサック、フィリピンのセブにおいて、フィールド調査を実施した。

フィリピンでは、セブ市のサンカルロス大学社会学部・人類学部の協力、またカーサゴルド博物館(Casa Gorordo Museum)、ラモン・アボイティス財団(Ramon Aboitiz Foundation)の協力を得ながら、セブ市中心部における、旧住民が多く暮らす地区、ティナゴ(Tinago)地区、パリアン(Parian)地区においてフィールド調査を行った。フィールド調査は、まず上記地区の balan gayo オフィスで地図を入手し、それを基に、調査のための白地図を作成した。その地図上にストリート名を入れ、ストリートごとの家族・世帯数を、balan gayo・キャプテンより情報を入手した。その家族について、居住年数、家屋の歴史、家族の状況についての一般的な情報をまずリストした。それを基に第二段階として、何世代にもわたって暮らす家族をリストし、彼らを訪ねてセブに伝わる教会などの遺産と、自身の家族に伝わる遺産について、その関わり方につ

いて聞き取り調査を行った。調査は、構造的調査のための質問票によるものを使い、また実際に家族に伝承されてきたものの確認作業を行った。さらに、半構造的インタビュー調査により、自由にインフォーマントに話してもらいながら、そのうちから遺産との関わりについての情報を収集した。

ラオスでは、チャンパサック世界遺産内と隣接する村落をサンプリングで抽出した。合計 10 村落 :None Viene; Nongsa; Dontalat; Phonsaoe; Thateng Theung; Nong Nokhchien; Sangkhen; Phanon-tai; Vatthat; Houasahoua においてインタビュー調査を行った。比較の基盤を統一するため、ラオスにおいても、皆が共有する遺産と、家族に伝わる遺産について調査し、特にそれらとのかかわりについての質問項目を中心に質問票を用いた構造的調査を行い、また自由に応答してもらう半構造的インタビュー形式で調査した。ここで用いた質問票は、フィリピンで用いたものと同じものを使用した。

2 つの地域での調査結果をまとめ、その中に見られるそれぞれの顕著な特徴を分析で明らかにした。

#### 4. 研究成果

上記調査の結果として、現在までの一次分析で次の 2 点が明らかとなっている。

- ・ フィリピン、ラオスの事例とも、公共の遺産、家族の遺産の明確な区別はないが、フィリピンの場合、公の遺産の概念はほとんどなく、あっても家族の遺産との関連でそれは捉えられる。家族の遺産を前面にだすことで、他の家族の遺産との競争も見られる。すなわち自らの家族の歴史的長さ、元々定着していたとことの証明として、遺産を開示する傾向がある。フィリピンの場合、調査した家族の 85%以上が、まず

自己の家族の遺産が遺産概念の中心を占めていると述べている。一方、セブで一般的な(サントニーニョ教会など)の古い教会は、外部の人々：セブの外に住むフィリピン人、外国からの観光客などには「遺産」としてとらえられているものの、セブの住民は、それは現実の自分たちの生活の一部であり、遺産とはとらえられていない。

一方、ラオスの場合、遺産には最初に「皆の遺産」として共有するものがあり、それと関連させながら、家族の遺産がある。すなわち家族の遺産は下位に置く傾向が見られる。こうした中で、遺産の認識はその住民(ほとんどが農民)の日常生活の活動の中に組み込まれている様子が確認された。実際、チャンパサックの人々は、ほぼ毎月には村の寺院に行き、何らかの形で僧侶と接触している。さらに折に触れて寺の集会所で儀式を行っている。一方、ワット・プーなどの遺産は、村の寺院とは別にみられているが、村の寺院とおなじく、満月の時、家族の儀式に際して訪れることもしばしばある。調査したチャンパサックの村人の 90%は、そうした場所を古くから伝わる、公共の「遺産」としてとらえているが、フィリピンとことなり、「自己の遺産」ではなく、「みなと共有する遺産」の考えが見られた。この点、フィリピンと大きく異なる様子が見られた。

- ・ 以上の結果から、遺産に対する住民の関わり方に大きな多様性が見られ、また何を遺産と考えるかについても多様性が見られた。フィリピンについては、古い教会などで知られるセブ市において、そうしたものを遺産として認識するよりも、家族の遺産を第一に考え、

それらを競争的に示す点で、フィリピン人類学が従来唱えてきた家族を単位とした社会が、遺産の概念にも通じることがわかった。

<今後の課題>

以上の研究成果から、今回の3カ年にわたる調査は、遺産の概念に見られる多様性を導き出すことができた点で、成功したと言える。ただ、次の課題も見ついている。それは、フィリピンでの家族中心ともいえる遺産の関わり方は、セブの特殊事情によるものかという点である。セブはキリスト教徒が圧倒的に多く、彼らの考え方は宗教的な意向もあるのかどうか確認する必要がある点である。もし宗教を超えて、従来から言われているフィリピンの文化的な傾向から由来するものであるとするならば、非キリスト教徒（例えば、イスラム教徒）の間の遺産の考え方、遺産との関わり方を検証してみる必要がある。

また、ラオスにおいても、家族の遺産の上位に公の遺産を置く場合、それが仏教的考えから遺産との付き合いが生まれるのか、検証してみる必要がある（例、Evans 1998）。すなわち、遺産の考え方への宗教の影響についての検証が必要であると考えられる。このため、さらにチャンパサックの調査を継続する。キリスト教徒の村、また遺産地域から離れた村の人々の間の遺産の概念についても調べてみる必要がある。結論として、今後多様性のパターンをより明確にすることと、多様性の中の多様性について研究を進めてゆく必要があると考えている。

<引用文献>

小田島 理絵 (Rie Odajima)  
2014a *Politics of Heritage - An Anthropological Study on Governmentality and Intimacy in Laos -*. Ph.D. dissertation (2014年、早稲田大学

大学院文学研究科提出)。

2014b *Ancestors of Heritage: Cognatic Society and Spirit Worship of Lao Peasants*. In Nishimura, M. ed., *Human Relations and Social Development*. Quezon City, Philippines: New Days Pub. Pp.253-274.

西村 正雄 (Masao Nishimura)

2007a ラオス南部の文化的景観と記憶。『ラオス南部：文化的景観と記憶の探求』。東京：雄山閣。Pp.1-33。

2007b チャンパサックの文化的景観と記憶。『ラオス南部：文化的景観と記憶の探求』。東京：雄山閣。Pp.34-55。

2008 ラオス、チャンパサック地域の人々の資源獲得パターン - キャッチメント分析の試み - 。『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第53輯・第4分冊。Pp.121-143。

2014 *Transformation of Cultural Landscape of Complex Societies in Southeast Asia: A Case Study of Cebu Central Settlement, Philippines*. In Nishimura, M. ed., *Human Relations and Social Developments*. Quezon City, Philippines: New Day Pub., Pp. 275-308.

三浦 恵子 (Keiko Miura)

2004 *Contested Heritage: People of Angkor*. Ph.D. thesis (submitted to SOAS, the University of London).

2011 『アンコール遺産と共に生きる』。東京：めこん。

Achier, H. and Y. R. Isar eds.

2011 *Heritage, Memory & Identity*. London: Sage.

Bortolotto, C.

2010 *Globalising Intangible*

Cultural Heritage? In Labadi, S. and C. Long eds., *Heritage and Globalization*. London: Routledge. Pp. 97-114.

Evans, G.  
1998 *The Politics of Ritual and Remembrance - Laos since 1975 -*. Chiang Mai, Thailand: Silkworm.

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Masao Nishimura Transformation of Cultural Landscape of Complex Societies in Southeast Asia: A Case Study of Cebu Central Settlement, Philippines. In Nishimura, M. ed. *Human Relations and Social Developments*. Quezon City, Philippines: New Days Pub. 2014, pp. 275-308.

〔学会発表〕(計 3 件)

Masao Nishimura Tourism Development and its Impact on the Lao-Cambodian Border Region. The 4<sup>th</sup> International Conference on Lao Studies 2014. (at the University of Wisconsin, Madison)

Masao Nishimura Issues on Heritage Management with focus on sustainability and capacity-building: A case study on Champasak World Heritage, Lao PDR, and Suggestion to Cebu, the Philippines. (Invited Special Lecture at the University of San Carlos, Cebu City, Philippines)

Masao Nishimura Tangible, Intangible and Living Heritage. IUEAS.2015 (at Thammasat University, Bangkok, Thailand).

〔図書〕(計 1 件)

Masao Nishimura ed., *Human Relations and Social Developments*. Quezon City, Philippines. 2014.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

(西村 正雄 (NISHIMURA, Masao))

早稲田大学・大学院文学研究科・教授。

研究者番号：30298103

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

小田島 理絵 (ODAJIMA, Rie)(早稲田大学・大学院文学研究科・非常勤講師)

シーカンサイ、パーカンサイ(Shikhanxay, Phakhanxay)(ラオス政府情報文化観光省、遺産局主任)

ヘラ、ジョセリン(Gerra, Jocelyn)(フィリピン、セブ市、カーサ・ゴロルド博物館館長、サンカルロス大学人類学部講師)